

ampp-016

植物図鑑／最期の戦い

中田満帆

2021

★★★★★

茫洋

Bald Mountain

新年の眼

Romantic Discharger

転落

Nastassja Kinski

real gone

映像についてのメモ

wolf moon

公営プール

愛についての短詩篇

亡命料理

一途な雄牛

roadman

2025 年式の孤立

石を投げる。

戒飭

浸水

襲撃

天理教徒に捧げるラヴ・ポエム

ブリキのペニス

舞台

失われた詩篇たち

長い坑

瞑目

植物図鑑／最期の戦い

★★★★★

著作・装丁・発行=中田満帆、発行所=a missing person's press

〒 651-0092 神戸市中央区生田町 1-1-13 新神戸マンション北館 303 号

078-200-6874 / mitzho84@gmail.com

茫洋

名づけられない
ものに惹かれ、
るが

そうになりたいとはおもえない
くちびるから
オレンジがめくれあがって、
わずかな熱量から
水上が
沸き立つ
のに

麦には国がない
ホテルの便所を占拠したい

分光器の子供たち
あるいは大礼服の老人たちから奪って、
テレビ塔を建設したい

路上で乾ききった猫の
むくろとともに

茫洋、
茫洋と、

しながら、
すべて、
の、
ことに、
眼を背ける、

深夜、

レスリング中継
が

うるせえ。

Bald Mountain

ジム・モリスンの「HWY」を観た
ヒッチハイカーが車に乗っ取って、
夜のモーテルへたどり着く
それだけの映画を

運転手の、
不在が、
意味と手を繋ぐことも
赦さない

ショットも、フレームも、
競艇用ボートですら、
いまはアメリカという夢の隠語

為す術もない、
と
いった体で、
形式がたちどまる
警邏隊が来たんだよ、

点滅される町、
回転する車のかげが、
ラジオの音楽に合わせ、
写真みたいに呼吸するのは、
いったい、だれのまぼろしなんだ？

ところで来週、
きみはかれらのパーティに参加して、
その素裸を見せてやれるかな？

ぼくはいやだね。

新年の眼

もはや愛しみもない
ところで、
立っている
わけにもいかず、
歩く

そいつは、
転落の、
技法ですら
ない

声のないほうまでずっと、
ずっと進みつづける
のは亡霊の、
流儀か

ボルネオが呼び、
神戸が答える
までもなく、

道は
冷たい

空き地の盛り土を眺め、
咳き、
唾を嘔く

かわいそうな子供靴が、
駅へとつづく小径で、
所在なく、
厭いて、
転がってる

救急車が通り過ぎた
まだ、
5日だというのに
新年の眼は秋を求め、迫る、

Romantic Discharger

花に石を足して
鱈をかけて
無花果で
割る

その答えは暗渠
信号は右
答えは真許
信号は右

ロータリーに呼ばれ、
細胞に阻まれ、
金木犀が、
足場の、
むこうで、
建築する。

二人称のなかにまだきみがいるなら、
花をふりまわして、きみを打擲したい
打ちすえて、
うち棄てて、
まったくないものにしたい

時間だ、
答えは澱み
信号は黒

あらゆるぼくのなかで、
きみの被膜が疼く
分解した虫垂の、
燃える色で、
永久の、そのさきを訪う

柘榴に頭蓋をかけて
眈を引く
そして心臓の
三乗を足す

その答えは裏窓
信号は左
答えは裏切り
信号は左

轉落

ひとひとが落ちていく
手のひらから
順繰りに

もはやなにも救いがないと悟るとき、
帽子をとって逆さに持ってみる

だれにとり、
答えることがあろう
おれは黙って死んだ水鳥を見下ろす

死が黙って行き来する
それでもなにもできずにいる

天使たちの午後
ハイネケンをチェイサーにして、
タラモア・デューを呑む男
不信心の魂しいはどうやっても癒えない

唇に笑みを
両の眼に涙を
やがて来る死に挨拶をしよう
たとえば交差点でだれかが立ちすくんでたら
やさしさを示すんだ

挟まれた中心街の点りが
長い夜の果てで
消えてる

Nastassja Kinski

身うごきのとれない暗がり
みずからを律するのは
わるあがき
に
過ぎない

ほとんどのひとが雨になったあとで
林檎の表皮を削るような
かぜが吹き抜ける
声をあげて

いまだ顔となまえが一致しない労務者たち
カナリアの鳴き声がやんで
ガス・スタンドから
2CVが発進する

かの女は恋人に会いに来た
かれは心臓発作で死んでしまった
かの女はかれの死を疑う

刑事が食卓に現れる
刑事の姿をした雨が現れる
距離というおとぎ話をしては消え、
飛距離という現実を話にふたたび現れる
だれもない食卓を雨が包囲し始める

訊いてもいい？
きみがどっからやって来たかを
軽業師の少女が画面のなかで
ぼくを見てる

どこでもないのだれかがいう

自転車が盗まれる
ナスターシャ・キンスキー

あるいはみな、
内なる他者の戯れごと
かも
知れないね

real gone

ひとたび花に臥す
すれば自身の姿さえも
見えなくなる
ほんとうになくなった

遠路の果てで
じぶんを見失う男
かつてはなまえがあったはずの、男

ほら、プールサイドを歩いて、
他者たちのかけを数えてるやつがいる
もしできるのなら、
そいつを突き落としたい

かけになまえのあった時代から、
遠くはなれてしまい、
いまでは鳥のかけすらも、
人間になってしまう

深夜、
再放送の特撮ヒーローものを観ながら、
アルコールのかわりに炭酸水を呑む

緑色の仮面が
廊下に飾られたまんま、
埃をかぶってる

「父さん、
ぼくはあなたを殺したい」

ジムの歌声が聴きたくなる
花にひれ臥してさ。

映像についてのメモ

たとえば最初の光りの切れっ端が
丘のむこうに落ちて
弾けるとき
おれはきみのことなんか忘れて
マスキング液をフォルクスワーゲンに塗ってる
だれかがおれのことをとやかくいうことはない
いまではみんなおれを観ない

映画みたいに
ラジオみたいに
ただ一方的に伝えるだけなら
どんなに楽かと考える
あらかじめ決められた科白のなかで
くたばりたい

かの女の新作はいまだ、
封切りされない
いまだ

天使と猟師が婚姻を交わす
入り江にむかう舟のうえ
銃と羽を重ねあわせ
しっぽりと

水上を音楽してる波、やがて熱くなる湖水
矢も盾もない、この瞬間を彩る映像
ふたりを包囲する水鳥の声
みんながカメラになって
ぶら下がる、
永遠の、
スモモの枝で、

いま。

wolf moon

月翳にまぎれて
見えなくなった友人を探しに
舟を漕ぐ

生田川上流から下ると、
二宮神社にぶつかり、
もうなにもわからない

冬ざくらが咲いてたあたりで
処女塚を過ぎて、
やがてぼくのなかの熾きにたどり着く
のはほんとうだろうか

だれかが剪った、茎の断面
青白い滴りがあって、
そのさきは夜

スペース・ピンボールを負けつづける、ひとりの男
そのおもづらに乾杯だ

友人など、はじめっからない
輪郭のない顔が去って
子宮発の、地下鉄に乗る

やがて悲しい茎たちが孤立者を呼ぶだろう
驟雨しつづける時代の表面加工技術
窓枠のなかで発射された過古が
遠く、

遠くの西洋便器ごと、
月光のドライブを
はじめるまで

公営プール

飛びあがる水、
飛沫に
反射する光り
陽光の種子みたいに

あるいはきみのせいかもしれない
マッチを擦って時間をつぶす
のは淋しくて、
青いおまえの悲しみ

ウエイト・トレーニングをやる
おもに腹筋を
時間と死は均衡を保つから
いつまでも終わらない

マチスよ、どうして、
そんなにもかかるんだ？
横尾よ、どうして、
そんなに早いんだ？

主題ない歌とともに
ぼくは泳ぐ
ぼくは泳ぐ

飛びあがるからだ、
水のなかの時間
反転する過古とともに

あるいはぼくのせいかもしれない
湯を沸かして時間をつぶす
のは眩しくて
つらいおまえ、なにを見てるんだ？

愛についての短詩篇

愛を巡る最後の伝言

もしもきみが牛なら、
ぼくを愛するだろうか？
もしもきみが鹿なら、
ぼくを愛するだろうか？
もしもきみが鯨なら、
ぼくを愛するだろうか？
もしもきみが蛭なら、
ぼくを愛するだろうか？
もしもきみが発動機なら？
おなじことだ、
きみは愛さない。

最後の晩餐みてえな愛の詩

おれのうちなる女の子たちがよくいったものだ、
"わたしのこと、好き？"って
"わたしのこと、好き？"って
その科白ならほんとうはおれのものなのに
かの女たちにいわせては淋しさを紛らした
ガソリンの切れた車が空ふかしをするみたいにいま、
"おれのこと、好きか？"
"おれのこと、好きか？"
そうくりかえす
そこにはだれもいないのに
かの女たちがおれのうちからいなくなって久しい
どうぞ、からかってくれ

亡命料理

夢を鑄造する道具がほしい
階段のうえで夜が
問いかけるから
他人の室から他人の室へ移動する
平行線上の窓に人参が大きくふくれあがる
かなしい大根の、葉っぱがゆれて、
まだだれも殺したことの無い手で料理しつづけるとき、
からみついた助詞が文語と和解する、亡命料理の図鑑だった
みんな、ばかだねとメカジキが吠えてる
きっとだれもいないくなった室で、
身を横たえることの技法は、
ひらがなでなければならぬのだ
それならば夢はふたたび主語へと還元される
おおきな林檎のなかでだれかが泣いてる
ガス・スタンドの灯りのもとで、
ローズマリーの壘を見つけた
やがて鑄造される夢のために家庭をしつらえよう
ひたすら他人を犠牲にしてメイクインを切りまくる
ソラニンが生えてきたから、殺戮を始める
きれいだね、きたないね、でも、きれいだね
遠心分離機がマクベスを朗誦するあいだ、
ふりむいた顔が他人じゃなかったというだけの理由で、
ひとがひとり、ひとでなくなり、
あらゆる名詞を失った、子供が隧道のむこうから、
ぼくを呼びつづけてる。

一途な雄牛

ぼくにまだかの女へのおもいが残ってたころ、
ぼくはじふんのことを一途な雄牛みたいに見てた
というものはじめてふちこめられた留置場で
ヘミングウェイの短篇を読んでたら
「一途な雄牛」っていう童話があったたからだ
これはかれが幼い甥のために書いたものだという
牛はいつも一途にじふんの標的にむかって突っ走る
惚れてしまったうつくしい牝馬にもむかってゆく
でも、人間たちにとちゃあ、邪魔ものでしかない
闘牛場へ送られ、それでも牛は一途に戦った
マタドールに誘われ、ピカドールに刺され、
それでも牛は一途に戦った
血は地面をあたかもやぶけた絨毯に見させる
観客はエールを呑み、ワインを呑み、
血や肉と、怖れを知らない男たちに熱をあげる
一途な雄牛は死んで、
マタドールが、ピカドールが、
頭をさげる、そしていう、
「われわれもこの牛のようにありたいものだね」って
ぼくは読み終えてからずっと、
緑色の壁や、緑色の蒲団を眺めてた
かの女への果てないおもい、
かの女のためにしたためたすべての辞はあの牛みたいに、
地平を突っ切り、そのまま一直線に迸ってるはずとおもい、
やがて来る、裁きのときにそなえて、
一千の手紙を書かせたものだとおもい、
そして明滅する未決囚たちの眼のなかで、
たったひとり携えたざれごとたちが、
なんだか輝いてるみたいに見えて、
とても気分が昂ふってしまった
ときおり涙さえ浮かぶ夜、
それでもぼくはけっきょく一途な雄牛じゃなかったんだ

与太者がひとり、女にきらわれ、他人を撲って、捕まっただけのこと
やがて消灯になって、本は回収され、暗くなったところから、
見えないかの女にむかってつぶやく
さようならと。

roadman

映画「ホーリー・モーターズ」に寄せて

横たわってしまいたい
たとえば壊れたラジオのように
死を恥じることのない終焉を描きたいとおもう
自動車がゆっくりと通過してゆくなかで
なにかもが意味をなさず、
だからといって、
貶められもせずにいる、
そんな風景を見たい
かつてわたしは
入り口のない町にいた
片足の男がモップを片手に歩いて去る
濡れたモップの、毛先の痕が通路を光らせる
やがてなにかが訪れそうで、決して訪れない
問いかけた貌はやがて漂白されて立ち止まる
ふたたび夢を建築するためか、
男たち女たちが倉庫のなかに都市を再現する
じぶんの人生を再現する
なにがまちがいで、
なにが正しいかは役者次第
きみを演じる他者のためにいったい、
どんな軀を用意するのか
ゆっくりと明けてゆく通り
だれかのおもいを曳航しながら、
不滅という二字に敗北するだけの生活
ロードマンはいつ眠る？

もしここにきみがいたなら
ぜったいに赦しはしないだろう
きみの代役を射殺すべく、
狙いを定めるだけだ
おれは車のなかで衣装に着替える
だれかの人生を確かめるため

再現するために着替える
だれともわかちえず、
さらに誤解されるための人生
たとえば腐った果実のように
死を曝すことに脅えず、
またこれを善しと見るとき、
かならずだれかがおれの手を使って、
舞台をばらまいてゆく
緞子がかぜにゆれ、
したたかにいま、
頬を打つ
迷いそこねたあまたの男女が
列をつくって発送窓口にならぶ
左手の指が3つない男とむかい合い、
書類に記入する情動
午から夜にむかって走る馬のようなひと
夜から朝にむかって眠る草のようなひと
だれかのおもいが憎たらしくなる
声のとどかない帯域に沿って、
ロードマンはいつ眠る？

2025年式の孤立

鈍色の季節はそのやり方で夢を撃ち落とす
たったいま過ぎ去った子連れ女が
石に囲まれた恣意に水をやる
回転にまぶされた窓が
ある男の意識へ呼ぶ
なにもかも水色の電気信号で、
だったらなんでもいいからとおもい、
きみのなかに侵入する筏、からだ、だから、
もし憂鬱ならば、ぼくが孤立をわけてあげよう
2025年式の孤立を

多くものがあの水を潜った
そして消えてった
だれかが寂しい声でいう
いまはまだ大丈夫だと
そんなものはうそっぱちだけど、
ぼくはその声を信じる
ぼくも大丈夫だと願うから

夢が撃ち落とされた
門が砕け、秋が産卵する、
そしてテレビのむこうから、
海が8Kで、迫る
もうじき落ちてゆくなかで夢はきみの寝室で、
最期の映像を描く、そして穢す
そうとも、裏切られたのはきみひとり
もうだれもない観客席で泣いてるのもきみだ
もし憂鬱ならば、ぼくが孤立をわけてあげよう
2025年式の孤立を

石を投げる。

かたちづけられないもの、
なづけられないもの、
それらの熾きにあってただ立ってるものたち
ガーゼがかぜにたなびき、
マスクで眼鏡がくもるといひの老夫
薄曇りの 8 時 26 分
霧を吹いたみたいな窓のなかで、
わずかな酸化を怖れ、
レインコートをかぶるひとひと
だれかが憎らしくて、
目醒めるとき
死の誘惑にかられたり、
ピンボールマシンのあざやかさをおもったりする
なにもかもが気鬱で、
できることが見当たらないとき、
人生そのものを悔やんで、
声にもできない
曖昧な欲望のなかで、
たえまなく称賛されること、
なおかつ恥をかかないことをおもい、
じぶんに従ってつくりあげる、
書きあげる、それでもほとんど多くのものは、
かたちづけられないもので、
なづけられないものだ
やがて静かになった湖水のむこうから、
見覚えのない水鳥が、その畔に立ち止まって、
ひとひとを見る、ひとつの蔑みのないまなざしが、
みなを辱め、やがてわれを忘れて石を投げ始める。

戒飭

まったくのたわごとみたいな死にかこまれて、
きみのまなざしがねがえて、
もはやついてくるものさえなく
門をされたおもづらが
門にならぶ

ペールの女はついに来なかった
だというのに列は澁みたいにつづき、
ぼくは立ち去る
かの女の膚に歯形さえ、
残せないままに

いえることは否
すべてに否
なにもかもがまったくざれごとみたいに過ぎ去り、
地獄から来た、いっぴきの犬が、
まちがったひとにむかって吼えつづけるから、
ぼくはきみのまぶちに沿って山麓バイパスを降り、
永遠の帰途へと尾をふった。

日本式の朝食(2)

気温があがる、
季節が変わりましたよ
野禽になればいっそあの小径を駈けていくものを
ぼくは鞆を抱えて地下鉄なんぞに乗ってる
知らないひとがじふんでないからって理由でどうしてか、傷つけたくなる
ナイアガラまで西神山手線はつづきませんか？ それは可能ですか？
市の予算とぼくの臍臓とのダイアログ、みなさん、準備いいですか？
ヨシナガさんが書類を持って、ぼくのまえをなにもないよう通過する
愛想笑いと電気工事だけがつづく
おじいちゃん、おばあちゃん、
どうもごめんなさい
こんなことになってしまって、
ぼくはあなたの娘みたいに献身的にはなれません
ぼくに科せられたものをたやすく譲ってしまう
ああ隣の席が空いてるんだ
ぼくは臆面もなく坐るだろう、そして次発の1両目にすら、
ぼくがひらいた本のように鰭が、
精液を噴きだしてきみを待ってることに脅かされる
なぜだ、
かぜが吹き荒れる、そっちの青がちぎれる、
もしも水禽であればずっと漂っていられたものを
侵入を赦されないぼくのもっとも暗いところから食みだした夜が反転する、
クロキさん、きょうのデータはぜんぶ保存しました、
それをあなたが眼のまえで喰ってくれるなら、
どうかうれしい
クロキさんは扉をしめて、なにもいわなかった
ぼくは朝食を食べにいった
そのときサーカスのピエロが、
定食の味に、
日本式の味に、
文句をいってたんだ

浸水

足許まで水に浸かっておれはおもう
ああ、こんなにも水があるなんて
ああ、こんなにも水が
雨は朝から継続的に降り、
あらゆる比喻を洗い流して降る
澱のような悲しみでさえ、
3分もあれば充分、すべてが雨になる
地階の自販機が漏電して、罐ジュースが路上に零れる
おれはこんな光景をまえにも望んでた気がする
それはきっと母のいったことのように
心の奥でずっとわだかまる、誘導円心のようなもの
「家族は他人のはじまり」
かの女はいった、まるで裁きがじぶんを通り越して消えてしまうみたいに
けっきょくはかの女だって裁きにはあらがえないだろう
くたばり切れない祖父母たちの面倒に駈られ、
かの女の弟たちはおかまおいなし
夫の家をでて、どっかの北部の町でパートに奔走してる憐れな女
おれはそんなものをひと度、懐い、そして掻き消す
明滅する信号機、あるいは失われたすべてのもの
おれは水からあがって室にもどって、
音楽をかけて、水を吞んで、
またふたたび、あらゆる時代の漂流物とともにして、
いずれ裁きに合うだろう自身の不出来を呪い、
そして、そして、ベルギービールから手をつけるんだ

襲撃

スパゲッティに飽きてひたすら蜆汁を啜ったのは午后、
まだ裸になれないひとびとのなかで奥まった歯ぐそをほじって、
長年の夢みたいなうつくしい隣人たちと罵声を浴びせあう
憂いを含んだ夕べ、牛丼屋のテイクアウトがやかましい通り
おれは詩を書くように小説が書きたい
デニス・ジョンソンの短篇集を読み、夢魔の到来を待つ
その頃合い、西瓜で武装したテロリストがおれのドアを叩き、
エホバの証人や天理教よりも質のわるい呼び鈴が鳴る、
おれは応えない
ヘビイチゴでいっばいの弾倉を確かめ、
スモモで充たされた冷蔵庫を盾にする
こいつはたったひとりの戦いなんだ
やがてドアがひらき、
裸の男たちが、雨の女たちと、
葡萄の種をフルオートで発射する、
たぶんマウザーだろう
まるできみが見た、
きのうの夢のよう
おれはルーガーにつめたイチゴで応戦し、
ひとりずつ殺してった
そしてパイナップルで火葬した
したたかにレモンの果肉がゆれる
アケビがばらばらになった通路にでて、
おれはやつらの灰をむさぼり喰う
到着した警官たちがおれをちっと見るのはきっと、
おれの編みだした詩学がその制服をあざ笑ってるからだ
安心しろ、きみにためにバナナを用意しておいたんだ
あらゆる比喩に抗い、決して挫けないきみのために
おれは催涙弾で清められた室のなかではじめて、
裸になろうと、
パンツを降ろし始めるんだ

天理教徒に捧げるラヴ・ポエム

女の子がおれの室にきた
なかなかかわいい
女だった
でもかの女は天理教の勧誘人
おれはいった、
子供のころ、
オジバガエリにいったことがあると
近所に天ン教の支部があった
その息子とは幼なじみだった
いまではもうただの他人だ
かの女はおれに紙切れを渡した
そこにはかの女の連絡先もあった
おれはかの女の長話をなんとか、
どうにか切りあげて酒を呑んだ
それからしばらくして、
おれは電話をかけてみた
なぜって？
かの女と愉しみたかったからだ
電話は繋がらなかった
おれは天ン教の支部にクレームを入れた
かの女とヤラせろといった
そして紙切れを棄てた
そして何ヶ月もの日々が音もなく、
戸口から戸口へ去っていき、
おれはまたしてもひとりだった
そしてきのう呼び鈴になった
おれはでた
若い女が立ってた
またしても天ン教だ
おれは慌ててドアを閉じ、
蒲団にもどった
——ああ、また瞞された

宗教は多くの恥知らずを創造した
という事実にあづきながらも、
おれはおもった
——もしも女ができるなら入信してやるんだけどな
おれはひさしくあの呼び鈴を聞かないでいる
カナダはどっちだ？

ブリキのペニス

かつて解剖学のはじめから
積年に至る人類の幻想
ペニスを持ってるからといって男とは限らない
ペニスを持ってるからといって男とは限らない
ペニスがないからといって女とは限らない

かたときも手放せなかった天使のようなもの
そんなものの在処をきみが知ってたとしたら？
たった一度でさえも裏切りががまんならないときに
愛するものが存在しないと気づかされる、ああ、そうだ
ペニスを持ってるからといって男とは限らない
ペニスを持ってるからといって男とは限らない
ペニスがないからといって女とは限らない

かつて経済学のはじめから
積年に及ぶ人類の欺瞞
ペニスを持ってるからといって男とは限らない
ペニスを持ってるからといって男とは限らない
ペニスがないからといって女とは限らない
ペニスを持ったかの女が男だとはいえない

やがて浴室をでて
きみはおれに目もくれず
ローブをかけて食卓へいく
そのときおれのなかでなにかが弾け飛んだ
だれだったかはわからない
ふるい映画のような貌が
眼前に現れる
そしてそれがじふんだってことに
不本意ながら気づくことになるんだって、ああ、そうだ
ペニスを持ってるからといって男とは限らない
ペニスを持ってるからといって男とは限らない

ペニスがないからといって女とは限らない

ブリキのペニスよ、
おれの下半身に勃起しろ
ブリキのペニスよ、
バスキアのように勃起しろ
ブリキのペニスよ、
女々しく泣いた夜を囁え

舞台

牧人みたいなおもざしをして、
きみが藪のなかへ去ってしまうとき
おれはかつてのことをおもいだす
豊岡の竹野で大衆演劇の一座にいたことを
読売テレビのディレクターがおれを演出してたこととか
どうだっていいことを考え、本質から逃れようとするおmoi
役者たちにあるのは脂身と、ギャンブルだけ
粗野な男たちと野卑な女たち
だせえジャージを着て、楽屋をうろつく
おれはおもった、——こいつはいけ好かないと
やがて一座は静岡へ
小汚い宿で
夜通し荷物を運んだ
坑のあいた床、見棄てられたバー・カウンター
そしてなんの見所もない土地とか
ディレクターは土足禁止をやぶって、
カーベットのうえを歩く
そして芝居が始まる
おれはやつのいうように派遣切りとか、いったんだ
実際はただただ道に零れ、職にあふれただけというのに
ある夜、おれはやめた
座長に撲られた
易怒性に煽られながら、
過古にむかって思考して、
アルコールのなかで、人生の地平が暮れてゆく
虹鱒を逃がせ、
虹鱒を逃がせ、
おれはおれという劇物を高めてしまってた
やがてなにもかもが遠くになって、
おれはおれの毒から解き放たれたのを知った
いまではかつてのように怒りをもってふりかえることもない
きみがほんとうのおれを知ったら、いったいどうおもうだろうか

ところで、おれの人生にはどうしたものか、ヒロインがいない。

失われた詩篇たち

ぼくというぼくは幾年もさ迷いつづけてきた
20 から 27 までのあいだ、どれだけ多くの場所にふつついてきたものか
口入れ屋と、飯場、病院、施設、どんな場所でも書くことを手放さなかった
26 のとき、恩師を怒らせて、かれはそれまで送ったぼくの詩篇をすべて焼
いてしまった

そのいっぽうでぼくは HDD の故障でデータを失い、さらには投稿サイトの
アカウントまで消してしまった

いまでもときどき、失った詩について懐いだすときがある

「さらば青春」

「ぼくの墓」

「あさり」

「雪のてっぼう」

「揺蕩うとき」

「風や、風や、風やら、」

「少女と旅」

「われら走者」

「死とうそ」

「詩と詩人について」

「青年」

そして「故リチャード氏の埋葬に関する余興」

いろんなことがあった

怒りっぽく、気まぐれで、子供のように過ごした、27 から 33 までの年月

さまざまなひとに攻撃を仕掛け、蹴散らし、面罵した夜

たしかなものなど、なにひとつない、花曇りのプラットホームで、

終日、呪詛を垂れ、自身を呪い、蔑んでた

一頭のアルパカが貨物列車に飛び込んで、

なにもかもが終わってしまう映画みたいに失われた詩篇たちが、

四肢断裂して花みたいに散らばってるよ

長い坑

おれときみが理解し得ないところでずっと坑を掘ってる
他者とはわかり合えないものの、集合体
^{くつぺら}靴籠を忘れる、調理器を抛る
だれとも共有されない時間だけが増え、
そのあいまにだれかの声を聴きたくなる
けれどなにも通って来ない壁があるだけで
きっとそれは仕舞われたまんまの五月人形みたいなものだ
雨季は過ぎた、だれよりも早く立ち去っていき、
ツルハシの重さが、なんとなく手に余るころ、
黄色い室が改装され、ひとが死ぬ
おもいはぐれた群れのなかで、
たったひとりでいることに厭き、
それでも、だれにも手を繋いでももらえないとき、
子供みたいに叫ぶんだ
「ぼくを見棄てないで、
ぼくをおきざりにしないで」と
そうはいっても、おれたちはひとりでに生き、そしてくたばる
カナリアの啼くところにはたどり着けそうにはない
たぶん、いくらか幻惑を与えてくれる存在を頼って、
みずからの弱さを幾度も露出する変態野郎さ
物語のキー・ポイントで蘇る過古、
そして通り過ぎたはずのひとが、
いまでもここにいて、おれを見下ろしてるという仮説、
固有名詞が融解するだろう、地点に於いていまは、
けっきょくのなりゆきできみを見限って、
価値の転倒を謀るしか、
ルサンチマンの処理法がわからないでいる
どうして、
マルクスよりもマルクスらしく、
どうして、
サルトルよりもサルトルらしいきみ
おれのなかで蒸留された嫉みのなかにまだ

きみを愛したいというおもいがいまだに残ってるのはなぜだ？

瞑目

ここがどこなんだろうかといふかることもある
わかりきったものがなんだかわからなくなる
ぼくはそうして鉈を持ってるんだろう
どうしてきみは杭を手放さないんだろう
いくつかの迷妄のなかで、
やっとのことで握った銃把がまるで、
酢飯のように零れてしまうとき、
きみはきっとおもいだす
黒い DS21 のかけ
もはやなんにも感じなくなった臥所で
たったひとりきみを回想の仲間に入れるとき
降り始めた雨がけものの革みたいに
つよい匂いを放つ
電車はどこへいった？
きみが乗ろうとしたやつは
すでに軌道をはなれて、
ぼくの熾きに沈む
どうか、
どうにか、
眼を瞑らせてください
もうこれ以上、見たくないものがあるんです
たとえばきみの笑顔、罪悪感に駈らすものはみんな
ああ、時系列が狂いだした、
解剖学が狂って、頸椎のもっともしたたかなところを打つ
夏が始まったんだよ、ルー、ジミー、たつ子、オウギさんたち
ぼくは少しばかり休憩して、
いちばん輝かしいところで、
ばかな詩人たちと、
卓を囲んで、
週末の 7 から 8 レースまでを予想してるだろうよ。

植物圖鑑／最期の戦い

雨あがりのビル街で待ちくたびれた動画とともにして、
黄色い茜が
楠の木のもとで啼く
首に搦むは絞首用の縄
くるぶしに罫をメめて
逆さにされた聖母が証言する、
嘘だ、
判事は賽を流れ、雪のなかで蘇る蛙
しだれ柳が断線した
傍受された野菊が
ひとりずつ自裁するのはたぶん、
過古からやってきた男の断面図のせい
ひとが詩に、辞が屹立する
おまえはことばなのか、
おまえはことばなのか、
棕櫚の枝で左手が泣いてる
オープンリールの建築家が愛撫を玄関するようになって、
もはやだれがことばのかがわからない
容疑者は3丁名の夕日、
背丈は6フィート、2インチ、
仕様はカラーで、ステレオを内蔵とのこと、
目下、極秘裏にて追跡調査を怠るな
そうしてぼくが追われる
最期の、水禽の過ちが、
桶のなかで融けて、
乳飲み子たちの、
箒を切欠に、
どうしたものか、
声がいう
死に絶えたものに声を与えることはできない
他者におのれの声を語れといってもそれは期待できない
ただ戦くものらとともにして、繰り返すがいい

舟に乗った青い山賊とともにしてぼくらは麦を吹く

枝を洗え

うろを洗え

そして畝を洗え

枝を洗え

うろを洗え

そして畝を洗え

枝を洗え

うろを洗え

そして畝を洗え（＊ repeat）

Printed in Japan